

## 「情報」の格言 P・F・ドラッカー

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート30回目のテーマは、「情報」に関するドラッカーの格言。「現在のニーズ」に応えるマーケティング、「未来のニーズ」に対応するイノベーション、それらの最も重要な基盤は「情報」。今回は、「情報」や「データ」に関する泰斗の格言を取り上げます。

### その1:「情報」とは

「情報」は、明治期に造られた「事情の報告」を意味する和製漢語。その後、英語“information”の訳語として、人間の行動や社会の存続に関する「知らせ」の意味で広く使われるようになりました。

またいつの世も、軍隊や企業の戦略の基盤となるのは「情報」。通信技術などの進歩に伴い、その重点はかつての「有無」から伝達の「速度」や「量」、そして内容の「質」や「精度」へと移りました。

さてマネジメントの父であるドラッカーにとって、「情報とは組織を一体化させるものであり、かつ一人ひとりの知識労働者に成果をあげさせるもの」。したがって「組織としても個人としても、いかなる情報を必要とし、いかにしてそれらを手に入れるかを知らなければならない。そして、それらの情報を主たる資源として体系化する方法を知らなければならない」のです。

### その2:「データ」「知識」との関係

そこでドラッカーが強く警告したのは、以下の混同について。「データは情報ではない。情報の原石にすぎない。それが情報となるには、目的のために体系化され、仕事に向けられ、意思決定に使われねばならない」。そして「情報は、人間の行動に結びついて初めて知識となる」のです。

いま社会を見渡すと、泰斗の懸念が現実のものとなっています。「道具としての情報を、何のために、いかに使うかを決めるのは情報のユーザーである」。そのため「ユーザー自身が、情報に精通しなければならない」のに、それとは逆に、「ほとんどの者が、自らの意思決定において情報の持つ意味を考えていない」どころか、召使となっています。

またそれを「考える」一部の者は、情報のプラットフォームを築き、「考えない」召使にせせと利用させ、そこから得た情報を「知識化」して膨大な私益をあげているのです。

### 出典（上田惇生訳、ダイヤモンド社）

その1:『明日を支配するもの』

その2:『未来への決断』

その3:『マネジメント』

『すでに起こった未来』

### その3:「情報力」とは

さてそんないま、改めて噛み締めなければいけない泰斗の箴言は、「情報力とは、情報を入力する力ではなく、情報を解釈して利用する力を意味することになった。いまやユーザー自身が、情報の専門家にならなければならない」こと。そして情報は、「統計的に意味あるものとなったときには、もはや未来にかかわる事象ではない。現在にかかわる事象でさえない。過去にかかわる事象になっている」という認識です。

さらに「データ化できないものを考えなければならない。データ化できないものについての配慮を忘れたデータ化は、組織を間違った方向へ導く。ところが、データ化に成功するほど、それらデータ化したものにとられる。したがって、優れたデータを手にしているように見えるほど、マネジメントが行われていない恐れがある」のです。

その代表は、利益や効率などの至上主義。そこで行われているのは「マネジメント」ではなく、「コントロール」のみ。そしてそれがもたらす弊害は数々の不祥事や格差拡大の真因となり、いまや世界中に拡散しています。

だからこそ「データは、一人ひとりの人間の動機づけにつながるなければならない。データによって得られる情報が行動につながるには、その情報が知覚に翻訳されなければならない」のです。

2022年8月29日 実空